

＜児童文化財に関する部会研究＞

(2) 1979年度児童文化財研究文献の総合化と体系的分析

＜部会員＞

十文字女子短期大学 中山 茂

児童文化財に関する研究文献のうち、大学・研究所などの研究紀要に発表されたものは、関係者でも目にふれることが少ないと思われる。そこで、図書や雑誌にみられたものと併せて一覧にすることができれば便利であろうと思い、本稿をまとめることとした。今年度が4回目である。

児童文化財の研究といっても、広い範囲にわたり、その角度もさまざまであるので、ここでは、児童文化財が子どもの生活とかかわりあうところに焦点をあてたものに限ることとした。それとて、明確に線をひくことはできないのであるが、心理学や教育学、社会学や歴史などの専門領域としての理論や技術の研究が中心となっているものとか、文学論、作家論、作品論といった専門的研究は敬遠し、専門的なものでは、児童文化理解のためにたすけとなろうと思われる史的概観、現状概観などを内容とするものを取りあげることとした。また、図書、雑誌については、講座、随筆などに類すると思われるものも敬遠することとした。

対象としたのは、1979年中に刊行された図書、雑誌、研究紀要を主とし、研究紀要は日本総合愛育研究所または同所児童文化財研究部会あてに寄贈されたもののうち、児童文化関係の学科をもつ大学、短大等のもの93冊について調査した。図書、雑誌については網羅的に調査したとはいえないが、出版関係誌を手がかりに、積極的に接触する努力をしたつもりである。

寄贈して下さった学校、著者の御好意に感謝するとともに、前記のような考え方で割愛した文献の多いことについてお許しをねがう次第である。

研究文献は、内容により、一般、絵画、音楽、うた、劇・お話、児童図書・児童文学、遊び、玩具、テレビの8項目に分類して紹介するのを通例としてきたが、今回は絵画に関するものがなかったので、7項目となっている。

1 一般

わが国の児童文化の特性——本田和子（「子どもと家庭」1979～10、東京都千代田区九段南4-2-12日本児童問題調査会）

理想主義的な求道的な、ひたむきな性格を帯びる児童文化運動がめざす児童文化と、一方で子どもをとりこにしてきた裏文化とよばれるものとの二面性がわが国の児童文化の特性であるが、テレビがここにくいこんできて、これらにどう対処するか、今後の課題である。

児童文化に関する私見——有田健一（大阪成蹊女子短期大学研究紀要第16号、1979～3）

児童文化の概念や内容についての提言でいろいろな示唆を含んでいる。たとえば、子どもの遊びが、独自の領域として考えられるならば、それとかかわりあう行事、スポーツ、集団(なかま)、慣習、信仰、興味、小遣い、手伝いなどを考慮にいれていく必要があるなどはその一例である。

学校子ども文化の創造——片岡徳雄編著（金子書房、1979～12）

学校文化は、文化の学校化という形で、いろいろ問題になっているが、それを克服する方向を示唆してくれるのは、いわゆる「児童文化」ではなく、「子ども文化」の導入ではあるまいか。そうした観点から、子ども文化とは何かについて基本的な理論を展開するとともに、文学、音楽、体育、演劇などに関する各論をのべている。視る文化から読む文化へ——小木美代子（「子どもの文化」1979～9、東京都豊島区目白3-2-8文民教育協会）

テレビと漫画は異常ともいえるブームで、親をもまきこんでファミリー文化を形成しつつあるともいえる。これが子どもの知的・情緒的発達を阻害する要因のひとつとなっていることはよく知られている。高度成長期以後、言語環境が子どもたちの生活からなくなってきている。言語の論理を映像の論理にいかにかからませるか、研

究し、実践に努力する必要がある。

2 音楽・うた

幼児音楽とその履修内容について——早川潔（四天王寺女子短期大学研究紀要XX, 1979～3）

幼児はひとり歌をうたい、それが発展し、うたとリズムに分化するが、うたえる音域はせいぜい5～8度。こうした発達過程から、幼児音楽は遊び、運動ということからはじめるべきである。ところが保育科における音楽履修は、ピアノや声楽など一般的な初歩的な履修が中心になっている。幼児音楽を理解し、音の発見や創造を育てていく能力を発達させるようなことも大切である。日本童謡集——三木卓著（平凡社1979年11月）の選集は、白秋、雨情、八十をはじめ多くの童謡作家の作品100余編がおさめられ、それらの作品を通じて、童謡が子どもたちの世界をどのような構造・価値観をもって表現し、どのような意味をもっているのかを通過しようとしている。それとともに、本書の3分の1の頁を占めている。原本のさし絵のカラー写真版の口絵が当時の状況を想像させる。

3 劇・お話

児童の観劇反応に関する研究(2)——星美智子、湯川礼子（日本総合愛育研究所紀要第14集, 1979～3）
前回の劇団四季出演の日生名作劇「冒険者たち」が「ズンとその仲間たち」と同じく、今回は「ふたりのロッセ」を材料として、小学6年生を対象に、臨場反応の観察や感想文の分析によって観劇反応を調査したものである。なお、今回は座席の位置による反応の差についての調査も加えられている。

民話の伝承と創造Ⅲ——坂本学（東大阪短期大学研究紀要第4号, 1979～1）

今は民話伝承の危機であると考えられているが、その要因として、家族構成や生活の変化、経済状態の変動などがあげられる。しかし、民話には人の心をゆたかにするものであるから、伝えたい民話は、新しく創造され伝承されていくことを期待したい。伝承の危機はまだ創造の好機でもある。

4 児童図書・児童文学

児童図書館の現状と諸問題——その2。児童図書館のめざすもの——高橋裕子（東京家政大学研究紀要第19集(1)人間文化・社会科学, 1979～3）
前回は、5つの児童図書館での子どもの意識調査であったが、今回は総括的に児童図書館のめざすべき姿をの

べている。読書を遊びのひとつとしてとらえること、集団体験としてとらえること、などを基調として、読書を媒介とするコミュニケーションの場として機能すべきことを説いている。

日本児童文学100選——日本児童文学者協会編（偕成社, 1979～1）

戦後の児童文学100選に、短篇集20選を加えて、実質的には120選となっており、41人の執筆者が分担して作品の解説をしている。巻頭に編集委員の座談会記事があり、巻末に戦後児童文学評論集21選が添えられている。世界児童文学100選——日本児童文学者協会編（偕成社, 1979～12）
わが国に翻訳された諸作品、それも日本の児童文学、子どもにかかわりあっている現代の作品100点を選び、それに19世紀の古典的作品20点を加えて、実質的には120選となっており、44人の執筆者が分担して作品の解説をしている。巻頭に編集委員の座談会記事があり、巻末に年表が加えられている。

絵本教育の実態(2)——広島市近辺の幼稚園の場合——相原和邦（広島女子大学文学部紀要第14号, 1979～3）

前回は、広島市の保育園における実態の調査であったが、今回は、広島市と呉市の幼稚園10園について訪問調査を行なった。絵本の選び方、絵本の与え方、読後指導などについて、事例的な比較研究がなされている。家庭生活における4歳未満児の絵本について——「児童文学」の内容に関する研究(6)——松原醇子（鳥取女子短期大学研究紀要第8号, 1979～12）

家庭における4歳未満児の絵本環境の実態を把握するために、鳥取県内の東・中・西部各地域にわたって、13保育所の4歳未満児の母親485名に対してアンケート調査を行なった結果の分析報告である。母親の選ぶ絵本と幼児の好む絵本とのずれなどが具体的にあらわれてきている。絵本のロケタリ—性——本田和子・清水いく子・角能清美（保育学年報1979年版「マスコミと保育」、フレンドル館, 1979～4）

幼児と絵本のかかわりの多様性に着目して、いろいろな事例をあつめ分類して、多様性の内容をあきらかにした研究である。研究者が協力園において日常生活におこる絵本にかかわる活動を観察記録し、その中からロケタリ—的機能を証明する事例をとり出して分類した結果、絵本による交差領域の成立、絵本のチャラク機能、流れが変わる、書物文化の投影、の4項目をあげている。絵本を楽しむことのできる保育者と子どもの人格形成——立川多恵子（保育学年報—前掲）

絵本を楽しむことのできる保育者は、子どもの気持がよくわかるのではなからうかという考えが研究の動機となっている。アンケートA（対象者の子ども観を知るように工夫されたもの）、B（絵本に対する関心の度合、関心をもった動機などを知る）の2つの調査の関連から、だいたい予想した結果が得られたと述べている。『赤ちゃん絵本』その心理学的考察——佐々木宏子（『日本児童文学』1979～7、借成社）

1978年9月に開いた「宇都宮絵本図書館」で、子どもたちが最も好んだ9種の絵本に対する子どもたちの反応と、絵本のもっている特徴から、赤ちゃん絵本は、具体的には、絵の輪廓がはらきりして背景が白のもの、描かれた子どもや動物が頭でっかちの二等身ないし三等身であることなどを指摘し、赤ちゃん絵本の意義を述べている。

子ども漫画の世界——斎藤次郎著（現代書館、1979～12）
子ども漫画の現代史を語るとともに、50余種の作品について体系的な分析と解説を行なっている。戦後の漫画は主として雑誌漫画として発展してきたが、その反逆として劇画は貸本屋本として成長した。テレビにアニメーション番組が登場し、週刊誌が出そろい、貸本屋はおとろえ、テレビ漫画や雑誌漫画にあきたらない年長の子どもは、新審判の漫画本や日常生活の中で展開する夢をテーマとするものに心を向けている。

子どもはマンガをどう読むか——子どもの文化研究所（『子どもの文化』1979～6、前掲）

1978年12月から1月まで、関東の子どもたち350人のアンケートの結果で、漫画雑誌を毎週買うのが8%、まったく買わないのが38%、コミック本は、毎週買うのが10%、まったく買わないのが40%。借りて読むのか、立読みか、読まないのか、意外と熱心な読者が少ない。『新・漫画選——子どもの文化研究所（『子どもの文化』1979～8、前掲）

石子順・川北亮司・上地ちづ子の3氏が討議を重ね、入手可能な単行本（コミック本）182点を選び、分担して作品の解説を書いている。必ずしも優秀作ということではなく、問題を含む作品もとりあげられている。

5 遊 び

集団での幼児の生活とあそび——中山佐知子（一宮女子短期大学紀要第19集、1979～12）

幼稚園、保育所における幼児の一日の生活の流れの中で、自由時間における活動の状態と、これに対する保育者の態度を観察し、保育における遊びの位置づけの根拠を把握しようとする。保育所にくらべて、幼稚園は自由

遊びの時間が制限され、したがって遊びの発展がなく、保育者の態度もまちまちである。いろいろと考えさせる問題がある。

子どもの文化人類学——原ひろ子著（晶文社、1979～2）
アメリカ、イスラエル、パングラデシュ、カナダのヘヤール・インディアンなど、いろいろな文化をもつ社会で、子どもがどう育っているかをのべている。児童文化に関連する部分はヘヤール・インディアンの子どもの遊びについてののべているところで、おもちゃを遊びとしてつくりながら、いい加減なものでは、納得しないということに関連して、今の日本の親たちの子どもの遊びに関する意識がいい加減のものであることなど、いろいろと考えさせられる。

伝承遊びの今日的検討——小林剛（『子どもの文化』1979～3、前掲）

「今の子どもは遊べない、遊ばない」というが、それはむしろ遊びが変わったととらえる方が正確ではないか、という観点から、伝承遊びの今日的検討の必要をとなえ、遊び伝承の条件として、大人の生活が地域に根ざし、郷土文化に対する責任の自覚をもつこと、子どもの自主集団を地域に生き生きと育てること、などを提言している。

6 玩 具

昭和玩具史——斎藤良輔著（住宅新報社、1978～3）

昭和年代の玩具の歴史を詳細に述べたもので、子どもの生活の変化、教育や児童文化運動の動きなどに関連していながら一面、業界史としての内容ももっている。付録に「産業構造審議会生活用品部会玩具小委員会報告書」があり、玩具の商品としての特性や分類、生産流通構造、問題点、今後の方向などが知らされ、「昭和玩具文化史年表」もある。

おもちゃと遊び——野上暁著（現代書館、1979～3）

大人が作って与える玩具に対して、子どもが使う「おもちゃ」の概念を用い、玩具をふくめてさまざまな「おもちゃ」。(テレビも当然そのひとつ)と子どもの遊びとのかかわりあいの変化を分析し、今後について提言する。おもちゃと遊びを手がかりとし展開された文化論であるともいえる。

7 テ レ ビ

放送番組利用に関する実験的考察——テレビ視聴中・視聴後の言語指示が幼児の伝達言語に及ぼす効果——芝田不比人（高知女子大学保育短期大学部紀要第3号、1979～3）

幼稚園5歳児クラス38名を教示群と非教示群とにわけ、NHK教育テレビ幼稚園保育所向番組「みんなのせかい」を視聴させ、番組の進行中に、教示群に対してだけ事前に用意した教示内容を場面に応じて語りかける。視聴後、幼児たちの表象を言語化して伝達するよう求めた実験である。実験は2つの形式で行われ、教示の効果を調査した。

テレビと幼児の人格形成 その功罪と活かし方をめぐって——上野辰美（保育学年報—前掲）
家庭における幼児のテレビ視聴に関し、両親の態度を重要視し、2回の実態調査の結果を総合分析して、極端なテレビ公害はおとなが心配するほどはみられないものの、親の側における指導的態度も、意図的・組織的な構えとはいえない難いとして、テレビ視聴における両親教育の必要なことをといている。

テレビと子どもの活動分析——中田カヨ子・岡崎比佐子・尾原志磨子・前典子（保育学年報—前掲）

都内及び近郊の幼稚園278園で、観察記録した3歳から5歳の幼児、延べ1407名の活動を、場所別、年齢別、性別に分類し、テレビの影響と思われる活動がどのようにあらわれるかを見た。活動の形は、やはり、うた、みぶりが多く、うた番組の影響が最も多く活動にあらわれている。

保育におけるテレビ指導の課題 園と家庭連携を中心に——舟橋齊（保育学年報—前掲）

名古屋市および近郊の5歳児とその母親について、母と子の視聴態度、TV・CMとオモチャとの関係についての2つの調査を実施した結果から、母親のテレビにかかわる態度が重要であり、それに対する保育施設からの連携が必要であることを示唆している。

幼児・低学年児のテレビ視聴に関する研究 実態調査を中心に——宮島三香子（文教大学人間科学研究第1号 1979~12）

埼玉県春日部市の団地について調査した結果、小規模家庭であるにもかかわらず2台以上のテレビ保有率が37%あること、低年齢児でありながら子ども部屋にテレビをおいている家庭が11%あること、親の見せたい番組と子どもが見たい番組とのあいだにずれがあること、番組

内容について親の側に意見の少ないこと、などがわかり、親の積極的な態度が必要であるとしている。

テレビを子どもの味方に——北川隆吉・隅井孝雄 編著（徳間書店、1979~1）

①テレビと子どもと親（隅井孝雄）、②「子どもの生活とテレビ」調査から（菊地利孝・斎藤賢治）、③テレビの仕組（隅井孝雄）、④教育とテレビ（北川隆吉）、⑤資料、の5章からなる啓発指導の書で、多くの人々にテレビを考えてもらいたいという趣旨で、海外事情もまじえて、テレビの送り手と受け手の現状と問題がよくわかるように構成されている。

「子どもの生活とテレビ」調査から——菊地利孝・斎藤賢治（「テレビを子どもの味方に」—前掲）

NHK放送世論調査所が、昭和52年に、東京都と盛岡市の小学生、中学生、およびその母親を対象に、世論調査の方法によって調査した結果の要点が述べられている。自分の視聴時間について、子どもは「ちょうどよい」と思っているのに、母親は「見すぎる」など、母と子の意識のずれ、母と子の視聴態度の関係が調査されている。

終りに

この年度は、絵本、漫画、テレビに関する文献が多くみられたが、これは当然のことであろう。多くの研究が、子どもの生活と発達とのかかわりあいについて考察されているばかりでなく、家庭において、親と子の関係のなかで、児童文化財がどう考えられ、とり扱われているかというところに、視点がひろげられており、研究はさらに一步先へすすめられてきたという感概をもたされた。さらに、これまで児童文化理論の研究において、あまり体系的にとりあげられることの少かったと思われる「子ども文化」の考え方について、直接に、あるいは間接に論及された文献が多くみられ、今後の研究に多くの示唆を与えられたと思う。

なお、上記の各文献のうち、もうすこしくわしい紹介は、朝日生命厚生事業団の御協力により別に刊行される研究報告のなかに含まれている。

目 録

目 録
1. 幼児・低学年児のテレビ視聴に関する研究 実態調査を中心に 宮島三香子
2. 園と家庭連携を中心に 舟橋齊
3. 園と家庭連携を中心に 舟橋齊
4. 園と家庭連携を中心に 舟橋齊
5. 園と家庭連携を中心に 舟橋齊
6. 園と家庭連携を中心に 舟橋齊
7. 園と家庭連携を中心に 舟橋齊
8. 園と家庭連携を中心に 舟橋齊
9. 園と家庭連携を中心に 舟橋齊
10. 園と家庭連携を中心に 舟橋齊